財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅷ

平成15年度

財団法人　松江市教育文化振興事業団

石田遺跡

所在地　松江市浜佐田町、薦津町地内

調査原因　島根県松江農林振興センターによる松江西部２期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（浜佐田トンネル）

調査期間　平成14年７月～12月、平成15年４月～６月

経　緯

平成14年７月からトンネル出口部分の調査を実施、12月に終了し、その後工事が行われたが、平成15年２月に法面が崩壊し、工事計画が変更された。これに伴い新たな開発予定区域で試掘した結果、古墳と弥生住居跡が発見された為、平成15年４月から６月に調査を行ったものである。

調査概要

(1)　弥生住居跡

平成14年度の調査で一部を検出していた加工段につながるもので、南向き斜面に立地し、東西の全長は12m、南北幅は３mが残存していた。柱穴と考えられるピットはあるものの、うまく並ばず、上屋の想定がしづらいものであった。遺物は床面や溝から弥生時代中期後葉の壺や甕、土すい、たたき石などが出土している。

この加工段が埋没した後、上層から掘り込まれた箇所もあり、須恵器片が出土している。

(2)　古　　墳

一辺12m、高さ1.5mの方墳である。墳丘は、旧表土を残して周囲の地山を削り、削った土を旧表土上に積み上げて築成している。主体部は、墳丘の中央に盛土の上から掘り込まれた二段掘りの土壙で、掘り方の大きさは4.6×2.2m、深さは最深80cmである。土壙の底にはさらに浅い掘り込みが見られ、割竹形ではあるがいわゆる舟底状の木棺があったものと推測された。棺底にあたる部分からやや浮いた箇所に赤色顔料（水銀朱）が撒かれており、銅鏡（５花文の内行花文鏡）１面と各種の玉類（勾玉４、管玉６、垂飾石４、ガラス製丸玉１、小玉160以上）が副葬されていた。

また、墓壙の南東側小口には細長い掘りこみが設けられ、中から鉄製の刀子１口が出土した。

本古墳が作られた時期は、丘陵頂部の立地、木棺の形状、ヒスイ製勾玉の存在、垂飾石の類例、刀子の形状などから、古墳時代前期末の築造になる可能性が高く、また、被葬者は銅鏡や玉類などの副葬品から見て、かなりの有力者層に属していたことが窺える。　（瀬古　諒子）

弥生中期加工段

石田古墳主体部

荒隈城跡

平成15年度に調査を実施した荒隈城跡は、松江市国屋町西ノ谷700・701－１・701－２に所在する。個人住宅建設工事にともなう発掘調査で、平成15年12月10日から平成16年３月17日にかけて実施した。暖冬予報に反して積雪が多い中、山陰の冬の厳しい作業であった。

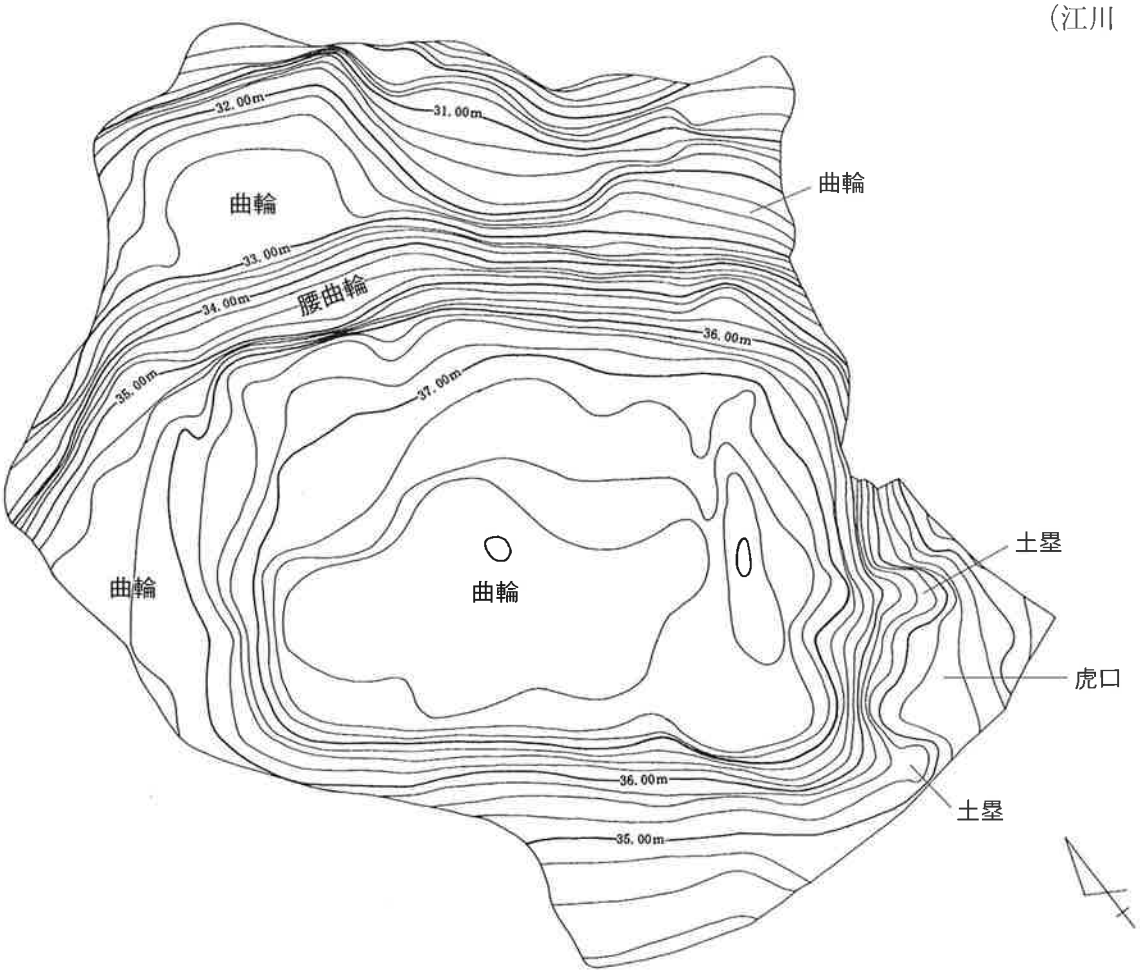
調査の概要

調査区は、表面観察だけでも曲輪の形状や配置状況が明瞭であった。全面発掘調査を実施したかったが、期間等の諸事情から、平坦面のみ全面発掘をおこない、斜面についてはトレンチ調査のみをおこなった。

その結果、山頂部の広い曲輪の周辺は切岸となっており、その造築状況は、まず地山を急峻にカットした後に約１ｍ近い盛土を行って肩部となしていた。山頂から下方にトレンチを掘って土層を観察したところ、北側斜面には腰曲輪を形成する造作がおこなわれており、さらにその下にも曲輪を形成する地山加工および盛土が観察された。調査範囲が限られ、調査区周辺には切り出した竹木が山積された状況であったため、トレンチ調査で確認した曲輪の形状や広がりまでは詳細にすることはできなかったが、大規模な土木工事を伴ったしっかりした山城であることがわかった。

虎口は調査区南東端にあり、平坦面を切岸と土塁で「コ」の字状に囲む形状を呈していた。

（江川　幸子）



調査前地形測量図

山頂部曲輪の切岸造築状況

虎口検出状況（左側半分）

薦沢砦跡

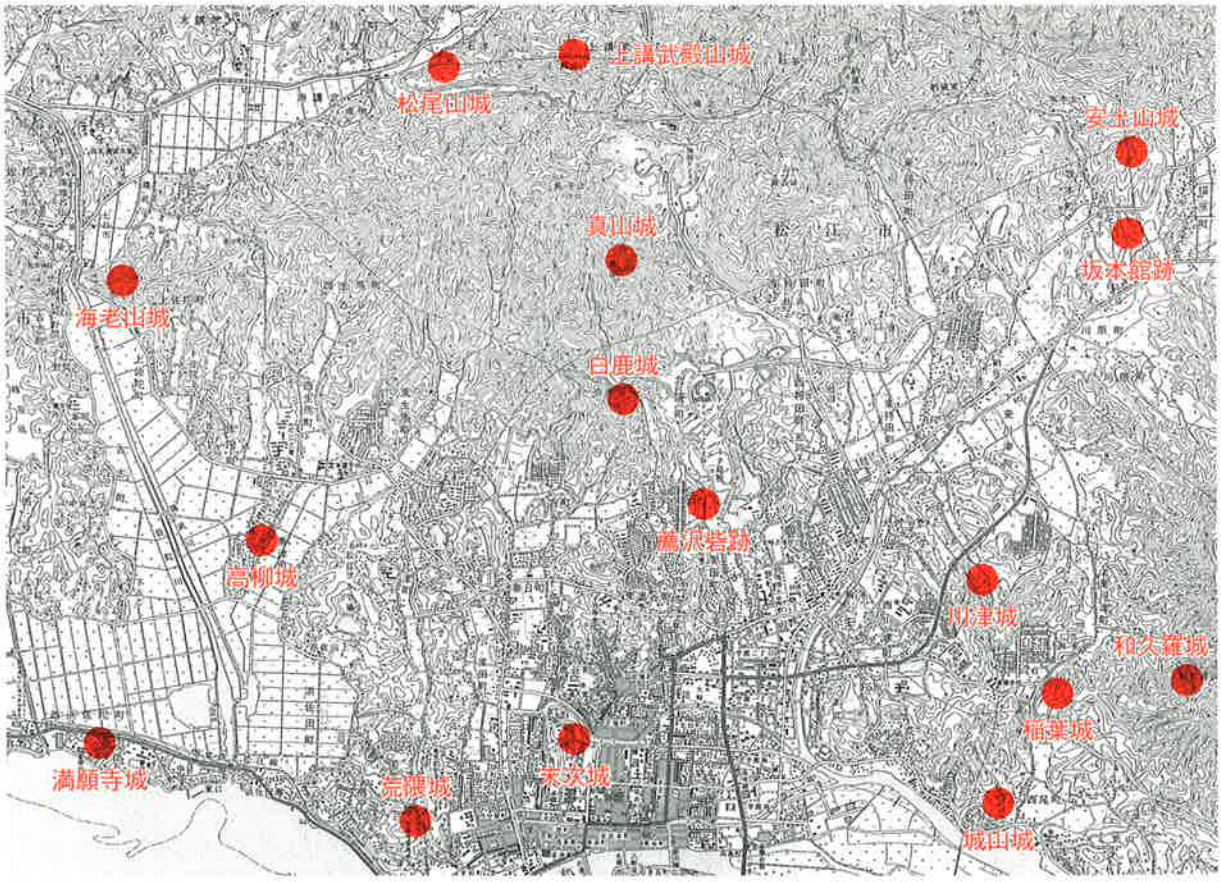
本遺跡は松江市街地の北側、ソフトビジネスパーク進入路予定地内の造成に伴って確認された遺跡で、法吉町に位置する。北山山地から南に派生する丘陵上にあり、北側には真山、白鹿山があり、それぞれ戦国期の代表的な山城（真山城・白鹿城）を有する。地形の表面観察の段階で丘陵頂上部に比較的広い平坦面が北から南へと続き、そして本遺跡で平坦面が東側へと方向を変えていることから、砦跡もしくは曲輪跡と思われた。

調査の結果、城郭に関する遺構は確認できなかったが、頂上部平坦面から土壙１基を確認した。規模は上端が長軸160cm、短軸50cm、下端が長軸140cm、短軸32cm、深さは22cmを測る。当初は‘墓壙’と思われたが、副葬品等の遺物が出土せず、明確な確証は得られなかった。また、南側トレンチで旧表土らしき暗褐色土が見られたが、平面的な広がりはなく、窪地に溜まったものと判断した。

遺物は少なく弥生土器片、須恵器片（甕片）近代以降の陶磁器片、石鏃が出土したが、城郭に関連した遺物や遺構からの出土はなかった。

砦跡という考古学的な確証は得られなかったが、尾根続きの北側には真山城、白鹿城があり、周辺の歴史的環境や地理的条件等の広義的な意味において真山城、白鹿城の城塞群の一部であったかもしれない。また本遺跡周辺の丘陵には曲輪を思わせるような平坦面がいくつもあり、砦であった可能性は否定できない。

（石川　　崇）



周辺の城跡・館跡の位置図（『出雲・隠岐の城館跡』島根教育委員会）

調査前全景

調査後全景

菅田横穴墓群

菅田横穴墓群は、松江市菅田町地内に所在する。ソフトビジネスパーク南側進入路の造成工事に伴う発掘調査で、平成14年度に松江市教育委員会が試掘調査を行った結果、遺構、遺物が確認された為、平成15年度５月から12月まで本調査を行った。

調査の概要

調査区は調査範囲1500㎡、標高28mの小高い丘陵であった。調査の結果横穴墓20穴、後背墳丘２基、古墳１基、土壙墓１基、溝状遺構１条を確認した。また、平成16年度から行われた造成工事中に新たに横穴墓２基と土壙墓１基が確認され、合わせて横穴墓22穴、土壙墓２基となった。今回の年報では横穴墓群と後背墳丘について概要を報告する。

横穴墓群

検出された22穴の横穴墓は丘陵の標高18.0m～25.0mの東から南、西側の斜面に存在していた。玄室の大きさは奥行や高さが2.0m前後の横穴墓が多かったが、22穴中５穴は１m未満の小横穴墓であった。玄室の形態もテント形、ドーム形、整正家形など様々であった。玄室内には横口式の石棺が置かれた穴、敷石が並べられた穴などがあり、また20号穴の床面からは８個の黒い物体が検出され棺台と思われた。分析の結果、細胞構造が全く観察されず、褐炭であることが確認された。

多くの横穴墓の閉塞部には完掘時浅い溝と刳り込みが見られ、木蓋をしていたと思われる。しかし

菅田横穴墓群全景（南東から）

検出時には溝の上に多くの礫が積まれていたところもあり追葬が行われたと考えられる。

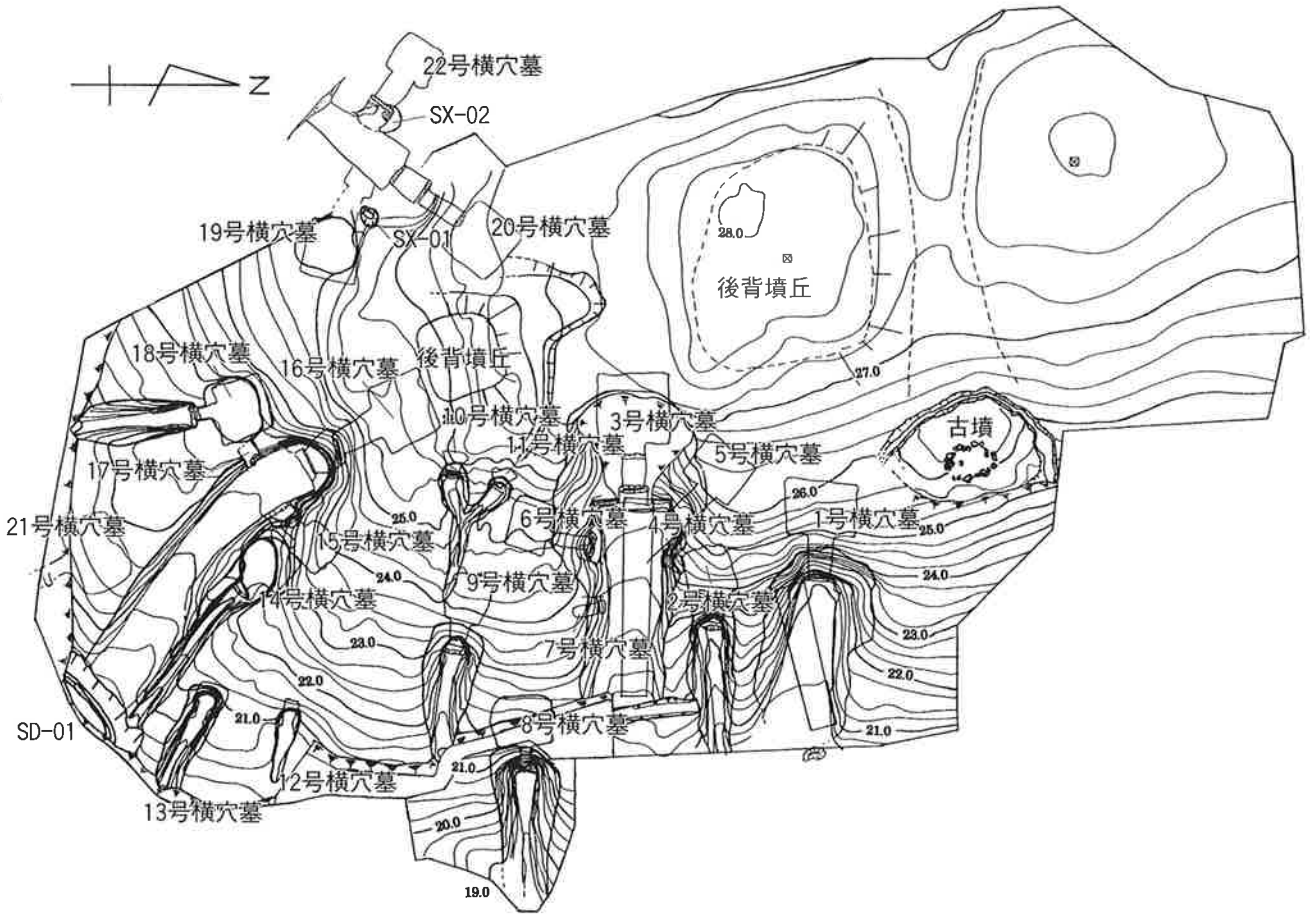
遺物は須恵器の蓋坏が多く、他に長頸壺、高坏、瓶、子持壺など、土師器は丹塗りの皿や坏、畿内系の坏、甕などが出土している。出雲４期から８期（６～８世紀後半）の遺物が多く出土しているが、埋土中からは回転糸きり痕のある土器も出土している。刀子、大刀などの鉄製品、勾玉、管玉、切子玉などの玉類、耳環も出土した。また、22穴中３穴からは頭蓋骨、足の骨など人骨や歯も出土している。

後背墳丘

丘陵の尾根上には２ヶ所の墳丘が存在した。南側の墳丘は地山面をやや整地した上に、一番厚い所で120cmの盛り土をして墳丘を造っていた。主体部は無く、北側には浅い溝があり、溝の埋土中からは子持ち壺の子壺や長頸壺の底部が出土している。

小　　結

菅田横穴墓群は調査範囲が狭い割には多くの遺構、遺物が確認された。出土遺物をみると６～８世紀にかけてこの丘陵に横穴墓が造られ、祭祀が行われていた可能性があると考えられる。本遺跡周辺にも赤碕切通横穴、桜崎横穴などがあるが、松江市の橋南に比べて橋北に確認されている横穴墓は少なく貴重な資料が得られたと思われる。　（広濱貴子）



菅田横穴墓群調査後地形測量図・遺構配置図（Ｓ＝１／300）

渋ヶ谷遺跡群

揩松遺跡

渋ヶ谷遺跡群は、松江市上乃木町にある総合運動公園内の３つの低丘陵上に位置する。本遺跡は３つある低丘陵の内、南側に位置し、平成13年度から断続的に調査が行われ、近世後期以降の道路跡や奈良時代もしくはそれ以降の大溝や連続ピットをもつ溝状遺構等が確認されていた。平成15年度はそれらの遺構の規模を確認するために丘陵全体にわたって全面調査を行った。

調査の結果、大溝は長さ58m以上、上端幅が最大で16m、もっとも狭いところで7.5m、深さが1.5～1.8mを測る。西から東に向かって下降し、底面の形状は東から西に向かってＶ字型～Ｕ字型～丸型と変化していく。堆積土層から“水つき”と呼ばれる水平堆積層や土中の鉄分の沈着による硬化した層が確認されるなど、地質学的にも興味深い土層だが、大溝の用途や、なぜ“水つき”のような水平堆積層が形成されたかなど不明な点が多い。

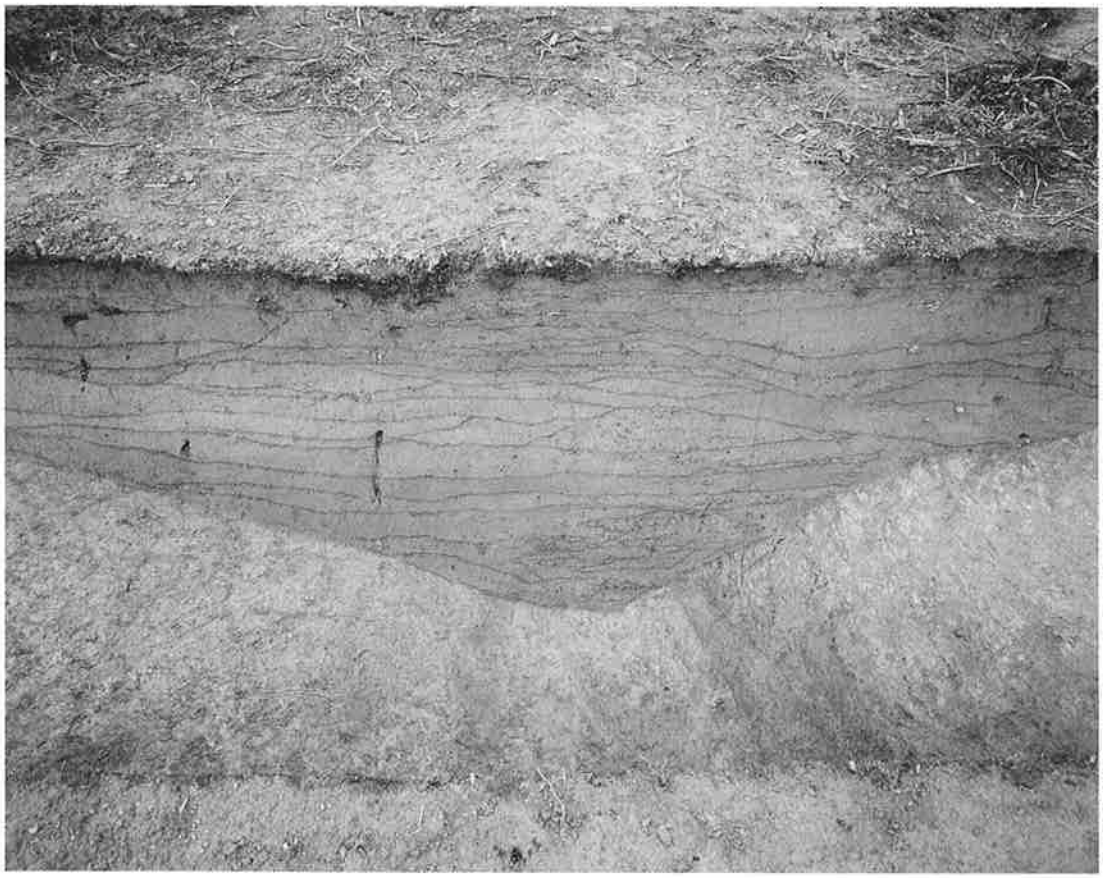
連続ピット内遺物出土状況

連続ピットを持つ溝状遺構は、溝の底面に直径25～90cm、深さ５～15cmを測る円形土壙が掘り込まれ、中には５～10cm大の石が出土し、埋土には固結した橙灰褐色土が堆積していた。このような連続ピットを持つ溝状遺構は道路状遺構と考えられる場合が多く、“波板状凹凸面”と呼ばれている。道路の維持管理のために掘られたと言われているが、本遺跡で同様の目的で掘られたかどうかは不明である。本遺跡の東側にある勝負谷遺跡（平成５年度に調査）や西側にある深田遺跡（平成５年度に調査）からも同様に連続ピットを持つ溝状遺構が確認されている。それらと関連があるかどうかは不明である。

本遺跡周辺は古代山陰道の想定地があり、本遺跡もその可能性があるのではないかと考えられた。大溝は幅が狭く、“官道”として利用されたとは思えない。江戸時代の絵図面から大庭村・佐草村から乃木村に抜ける道があったとされ、古代においても道路であった可能性もあり、“間道”のような道だったかもしれない。

（石川　　崇）

連続ピットを持つ溝状遺構



大溝の土層堆積状況

山津窯跡ほか

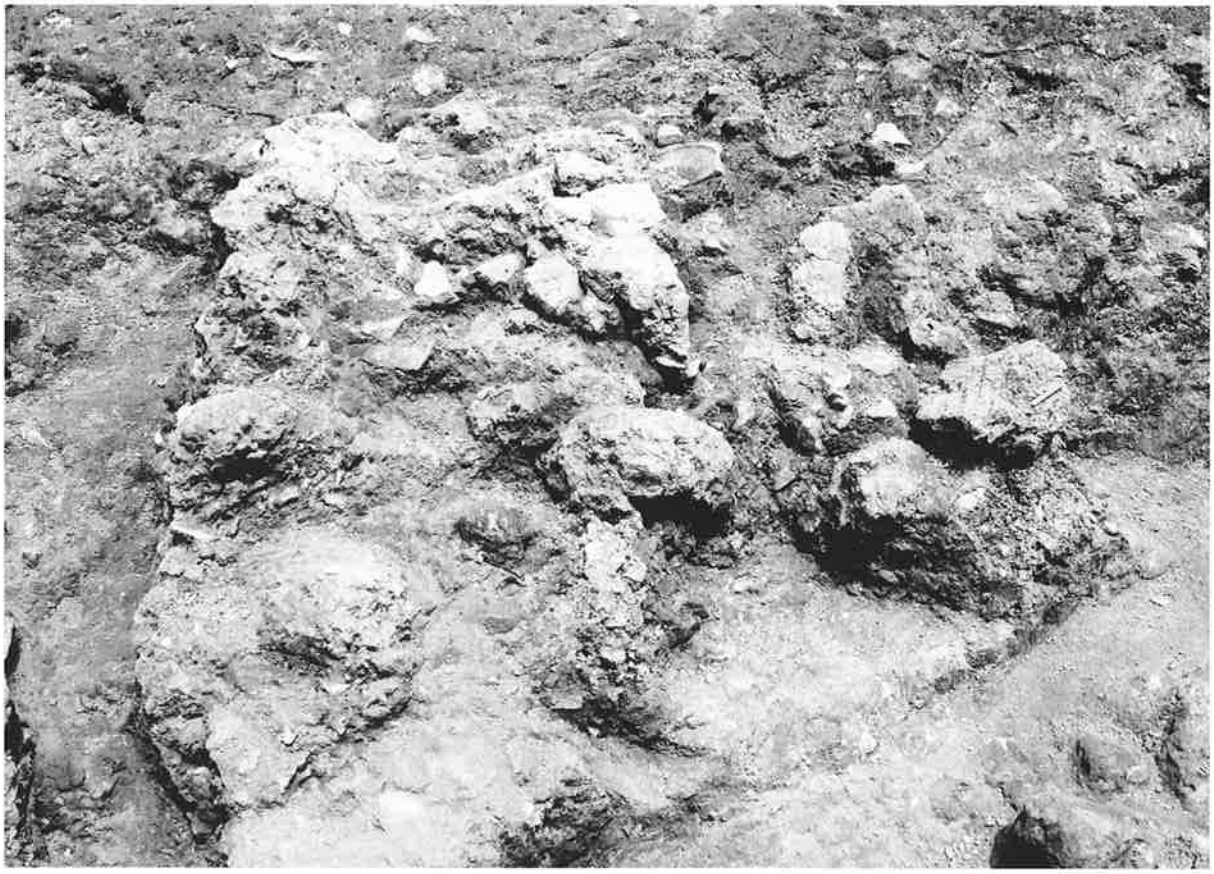
山津窯跡は松江市大井町に位置する。県道本庄福富松江線道路改良事業に伴い、平成13年度から調査を実施している。調査は道路拡張予定地の西からA区・B区・C区……と呼称し、13年度はA～C区を、14年度はH～N区を、15年度はJ－2区をそれぞれ行ってきた。本報告書の刊行は16年度末であるが、既往の調査については、各年度の埋蔵文化財年報を参照にしていただきたい。

平成16年度については、H－2区（440㎡）の調査を実施した。この調査区は東にH区、西にJ区と隣接している。H区とJ区は、それぞれ山津1号窯（6世紀末～7世紀初頭）、山津4号窯（8世紀初頭）の須恵器窯を検出しており、北西10～20mでは立会調査において山津2・3号窯が検出されている。すなわち、H－2区は山津地域の中でも、最も窯跡が密集する地点に該当する。

H－2区は、調査前、稲穂を干すための、はで木を入れておく小さな小屋が建てられており、北側（道路側）から南側（コンクリート敷き小道）に向かって急激に落ちた地形を示していたが、地権者の言によれば、戦後に小屋を造成する時に水平にしたとのことであった。

H－2区の基本層序としては、バラス・及び茶色盛土等の撤去下には層厚20～50㎝の暗茶褐色土のシルト層が見られる。これは西端で高く（標高8.5m）、西側で急激に落ち込み、中央以東は標高7.8m前後で水平堆積している。この層からは、新しいものでは8世紀代の坏類が出土した。同層はある

H－2区全景（北西より）



Ｈ－２区　窯壁片・須恵器検出状況

定点では旧表土を形成していたかもしれない。

それより（標高7.5m）以下は赤茶褐色の砂質土が最大１ｍほど堆積しており、地山面（黄色シルト）に至る。この包含層は赤く焼けしまったような砂質土で須恵器・礫が多く含まれていた。ブロック土や炭層によって細かく分層を試みたが、細分の識別は困難で基本的には単層と考えてもよいであろう。出土遺物も概ね７世紀中～後半で時期的に大きな差異は顕著ではない。また、須恵器に混じって窯壁の塊が大量に出土した。いずれも現位置を保っているものはなく、窯壁の破片も辺１～５㎝程度の小さなものが大部分を占めていた。

Ｈ－２区ではこの他、明確な遺構は検出されていない。当初、窯壁が大量に検出され、窯跡の存在も想定して調査を実施したが、いずれも現位置を保っているものはなく、辺１～５㎝程度の小規模なものが主体であり、共伴する須恵器も概ね時期的なまとまりがある。

付近には多数の窯跡が立地し、数百年にわたって窯が築かれ続けたことを考慮すれば、付近にあった７世紀中・後半の窯を人為的に破壊して、それが破棄されたような状況が考えられないではなかろうか。

これまでの周辺での調査によって、山津付近は６世紀後半～８世紀（もしくは９世紀）の長期間に渡り、極めて近接して須恵器の窯が築かれ続けていることが明らかになっている。今年度の調査は、これら集中する窯跡地点について、廃絶した窯を破壊するなどの人為的活動を想定される知見が得られたと考えられるだろう。

（藤原　　哲）

井 廻 古 墳

位置と環境

井廻古墳は、松江市上大野町宇井廻2666－３に所在する。松江市のほぼ西端で、大野川が浸食した谷に向かって開く、小さな谷に面した低丘陵上である。

周辺の遺跡としては、大野川をはさんだ東側丘陵上に本堂古墳群がある。その周辺では鉄鏃が表採されているが、時期までは確定できていない。中世には大野氏が谷のやや上流に居館をおき、東方の本宮山に山城を築いている。

調査に至る経緯

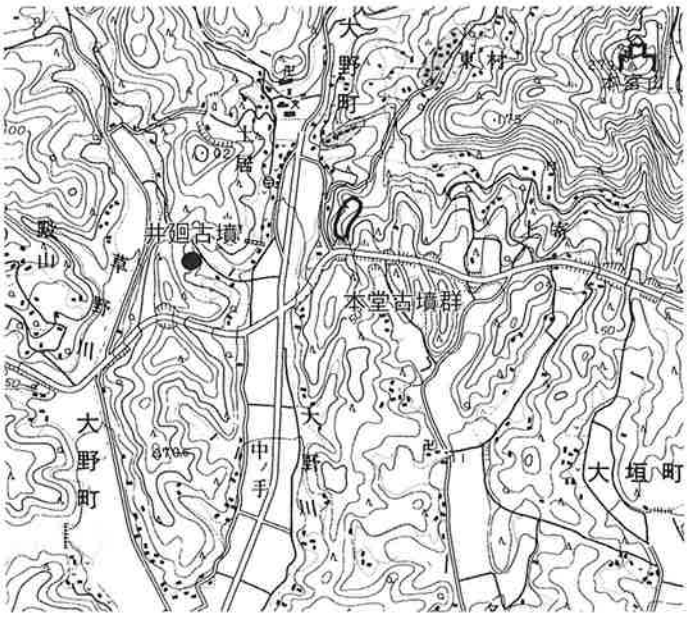
松江市が策定した上根尾農道整備事業にともない、松江市教育委員会が遺跡分布調査を実施した。その結果、果樹園の崖下に多数の平石が散乱している状況と崖上端部に側石左右各１枚と小口石１枚が残存し、組合箱式石棺が存在していたことを確認して本調査に至ったものである。

調査の結果

松江市教育委員会の遺跡分布調査時には石棺の石材が残存していたが、本調査時には、石材は全て抜き取られていた。したがって、わずかに残った石材の痕跡のみが調査の対象となってしまった。

調査の結果、石棺の主軸はほぼ北北西－南南東と推察された。石材は厚さ５～７㎝の板状割石で、小口石が左右側石に挟まれる形状で、床面に敷石はみられなかった。北北西端の小口部分での石棺の内法は約30㎝であった。石材の設置方法は、残存状況不良のため確認することができなかった。

次に、この箱式石棺が周溝をもつものであれば、その形状・規模をする必要があり、果樹の隙間をぬってトレンチ調査を実施したが、周溝を検出することはできなかった。したがって、事業名から古墳とは呼称しているが、単なる組合箱式石棺であったかもしれない。



井廻古墳位置図（Ｓ＝１／25000）

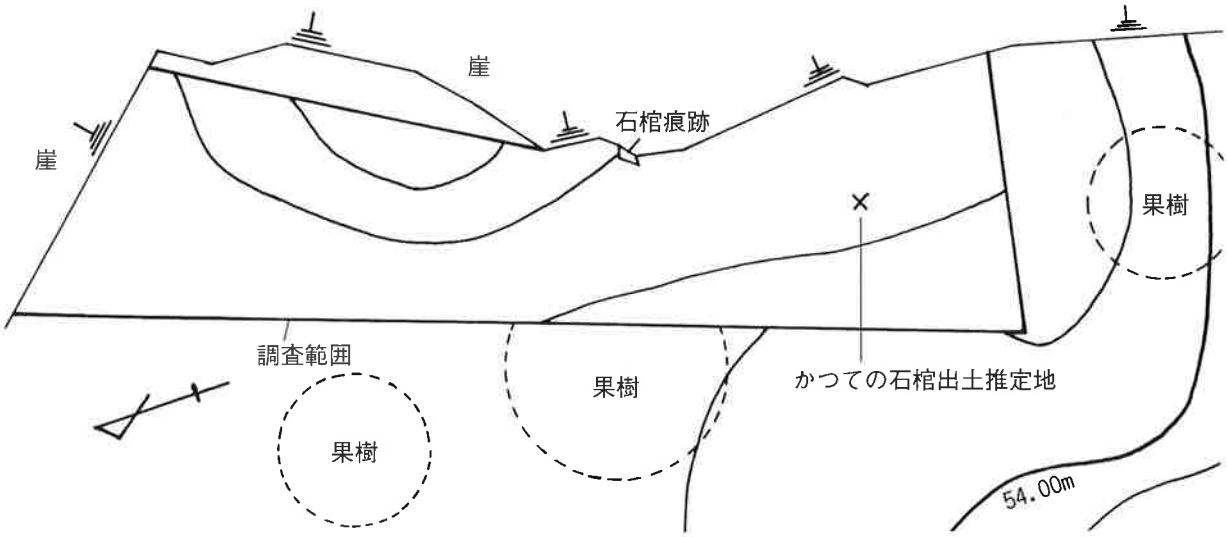
石棺内から副葬品は出土せず、石棺が造られた時期は不明である。

小　　結

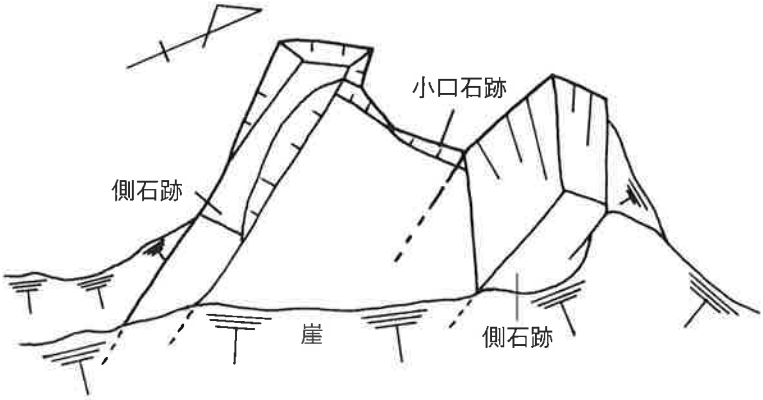
今回の調査では石棺に関連する情報をほとんど得ることができなかった。

地権者の話によれば、果樹園をつくる前に自家用重機で元来の地表面より１ｍ近い削平をおこなっており、その際にも今回露出していた石棺の約５ｍ西側の地点で石棺が出土したとのことである。石棺は、少なくとも２基が存在していたようである。

（江川幸子）

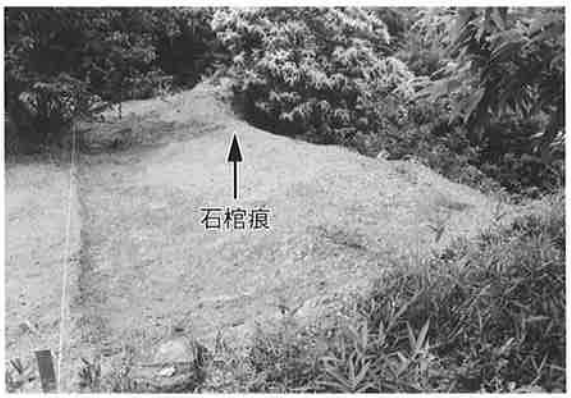


調査成果図（S＝1／100）



石棺痕跡実測図（S＝1／10）

井廻古墳遠景（東より）



井廻古墳近景

石棺痕跡（西より）

石棺石材

宮ノ前遺跡

位置と環境

宮ノ前遺跡は松江市のやや北東、持田町字宮ノ前200番地４筆に所在する。本遺跡は小高い丘陵の裾部にあり、調査前は畑地であった。近くには北山山地があり、近年ソフトビジネスパークが造成された。

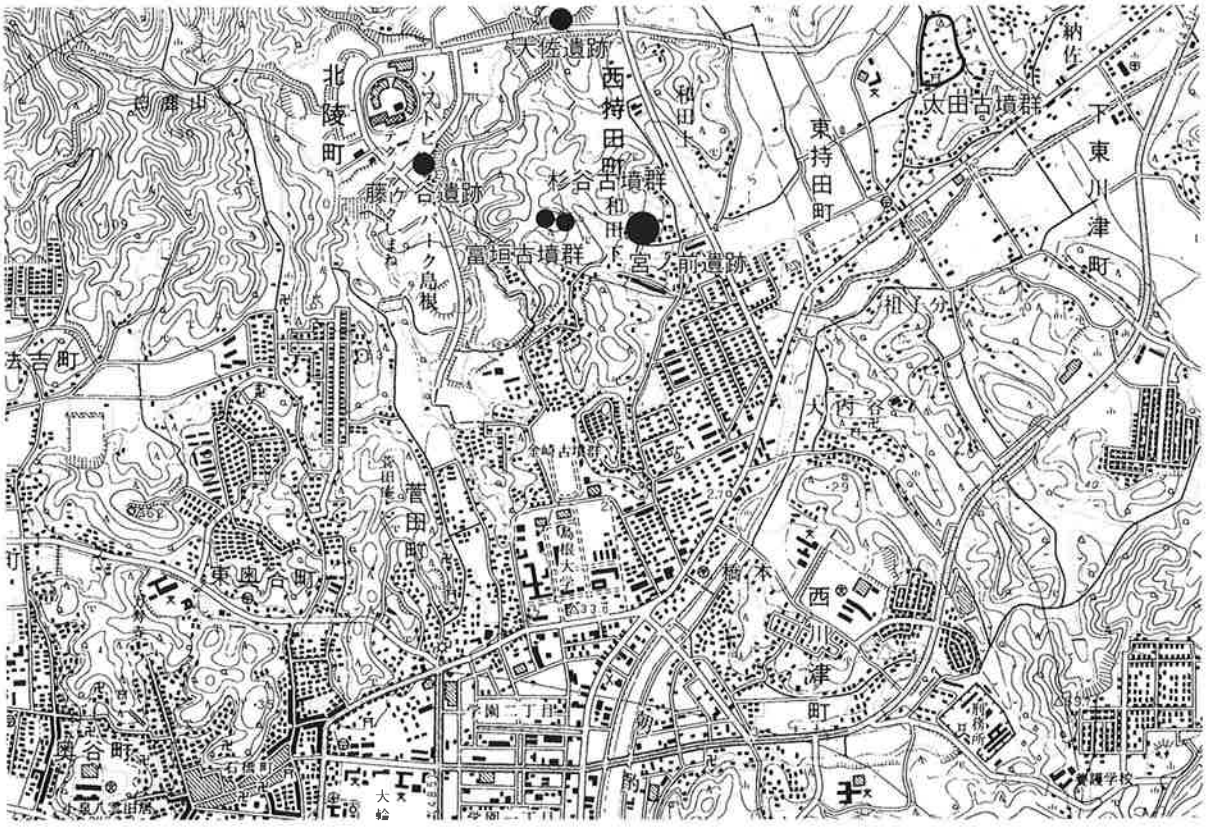
本遺跡周辺には宮垣古墳群、杉谷古墳群、少し離れた所に太田古墳群など多くの古墳や大佐遺跡や藤ヶ谷遺跡などが存在している。

調査に至る経緯

個人住宅地の造成工事に伴う発掘調査である。平成15年に松江市教育委員会が試掘調査を行った結果、遺構と遺物が確認された為、平成16年１月から３月まで調査を行った。

調査の結果

本調査区は調査前畑地であった。耕作土は10～20cm程度しかなく、掘り下げるとすぐに遺構面が検出された。耕作土掘削後の面を第１遺構面とし、地山面を第２遺構面として調査を行った結果、第１遺構面からは土器溜り、ＳＤ－01～04、ＳＸ－01、ＳＫ－01を、第２遺構面からはＳＤ－05、06と住居址２棟を検出した。また調査区内からは多数のピットが検出された。



宮ノ前遺跡と周辺遺跡の位置図（Ｓ＝１／25000）

＜第１遺構面＞

１）土器溜り

調査区北隅1.0mの範囲で検出された深さ50cmの落ち込みで、埋土には炭も多く混ざっていた。古墳時代中期の甕の口縁や高坏などが多く出土した。

２）ＳＤ－01～04

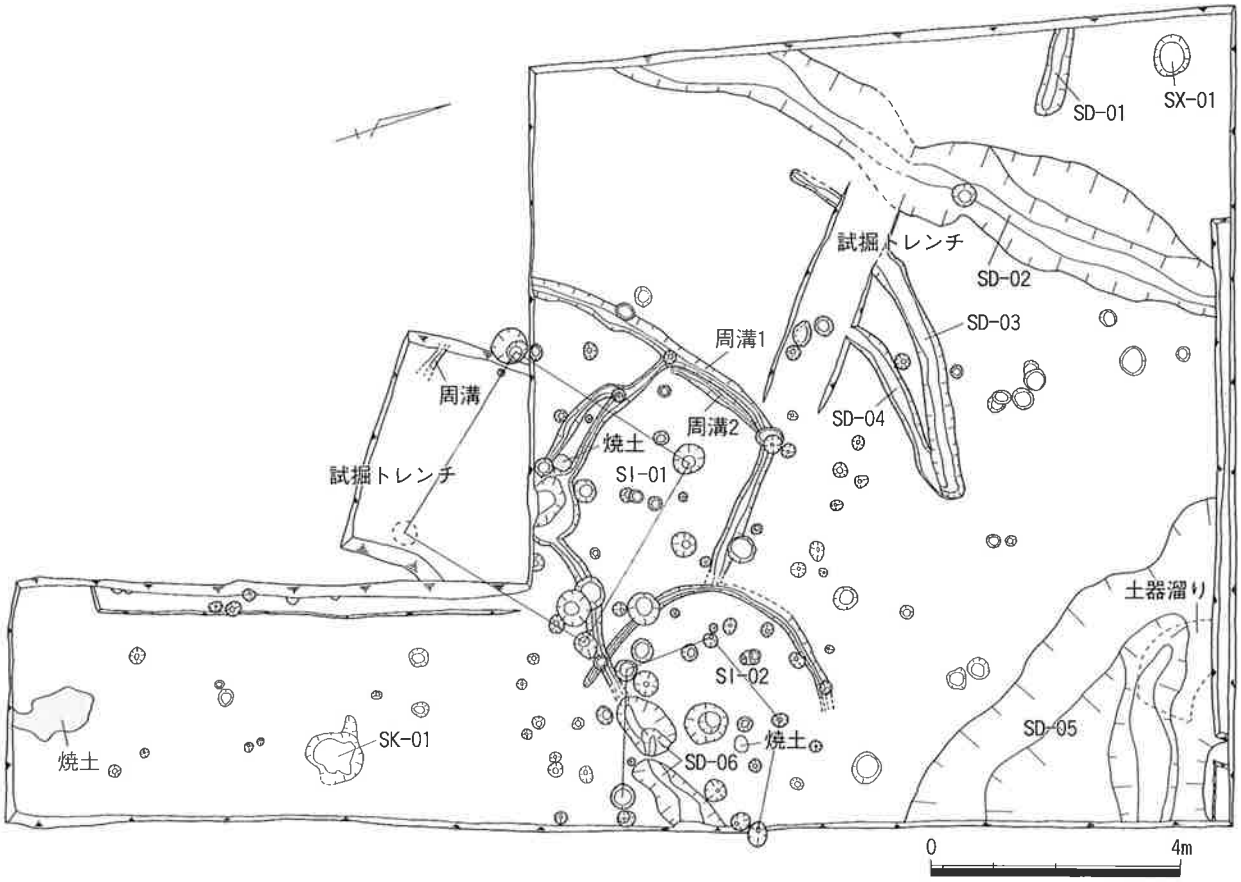
これらの溝状遺構は調査区西側で検出された。ＳＤ－01は埋土が耕作土であった為、畑の耕作時に掘られたものと思われる。

ＳＤ－02は斜面の地山面に掘削された溝と思われるが、溝の下方（東側）の壁面は削平されており10cm程度しか確認されなかった。埋土からは弥生土器と一緒に磁器や江戸時代の陶器碗などが出土している。

ＳＤ－03、04は２条の浅い溝で、土層断面からＳＤ－04の後にＳＤ－03が掘り込まれたことが確認された。ＳＤ－03からは古墳時代前期の壺の口縁が出土している。これらの溝状遺構の性格は不明である。

３）ＳＸ－01

ＳＸ－01は調査区西端で検出された土壙墓で、土師器の坏、高坏、甕片が出土している。これらの遺物は流れ込みではなく、埋土の上面から出土していることから、遺体を埋葬しその上に置かれたものと思われる。



調査成果図

4）ＳＫ－01

ＳＫ－01の床面に近い所からは糸きり痕のある須恵器片が出土しており、８世紀以降の遺構と思われる。

＜第２遺構面＞

1）ＳＩ－01

隅丸方形の住居址である。調査範囲が限られていた為、住居址全体を調査することはできなかったが主柱穴は４本であったと考えられる。住居址のほぼ中央には深さ70cmのピットがあり、中央ピットと思われる。西側には周溝が２本あり、そこから中央ピットにかけて２条、中央ピットから東側に向かって１条の浅い溝が検出された。確認された周溝間の距離は5.05mを測り、住居址の大きさもほぼこれに等しいと考えられる。

出土遺物は細片が多く、床面から時期のわかるものは出土していない。埋土中から古墳前期の甕の口縁が出土している。

2）ＳＩ－02

ＳＩ－01の下方、東側で検出した竪穴住居址で遺存状態はよくない。明確ではないが主柱穴の配置からみて、平面プランは多角形状を呈すると考えられる。東側の未調査区に１本柱穴があると推定すると、６角形プランの住居址と推測される。埋土からは弥生後期の甕の口縁が出土している。出土遺物、住居址の形態からＳＩ－01より古いと思われる。

3）ＳＤ－05、06

調査区東側で検出された溝である。ＳＤ－05からは弥生後期の遺物が出土しているが、自然流路の可能性が高いと思われる。

ＳＤ－06はＳＩ－02の遺構面から検出された溝である。埋土からは弥生後期の遺物が出土しているが、この溝がＳＩ－02に伴うものかは不明である。

小　結

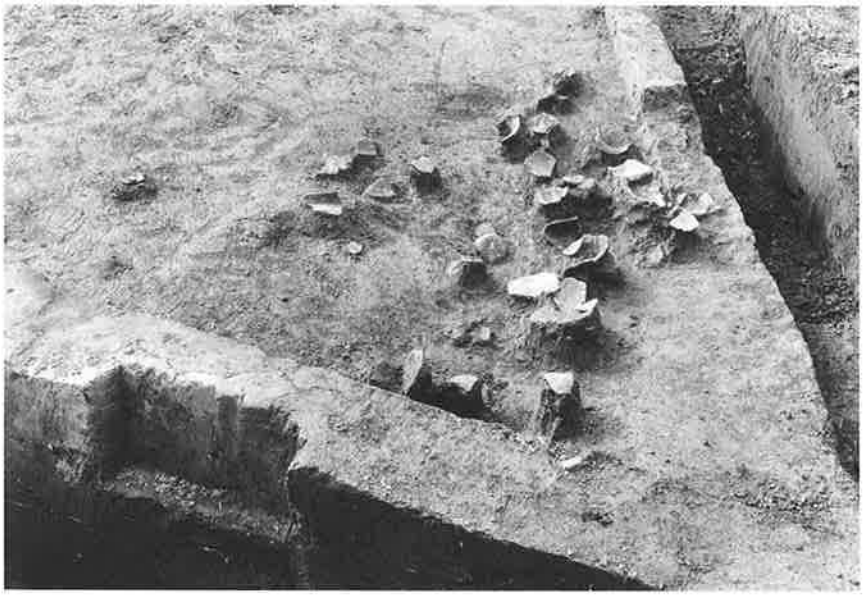
今回の調査では溝状遺構５条、土壙２基、土器溜り、竪穴住居址２棟を検出した。また調査区内からはピットが多く検出され、他にも住居址があったと考えられる。

遺物は弥生時代後期前半から江戸時代の陶器まで幅広く出土しているが、弥生時代後期から古墳時代中期の遺物が多かった。弥生時代後期前半からの遺物があり、本調査区および周辺に住居が存在し人々が生活していたと思われる。

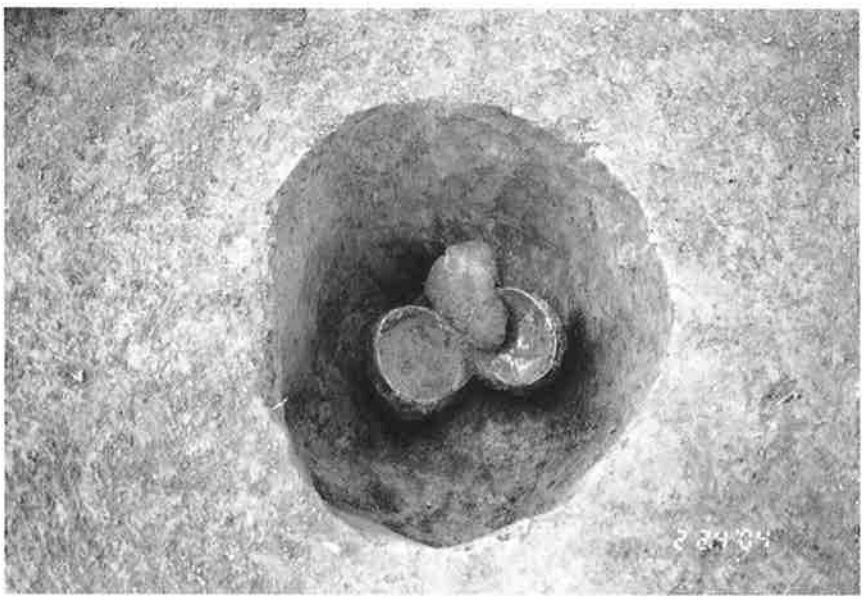
今回の調査は個人住宅の宅地造成に伴うもので調査範囲も限られていた。検出した遺構には性格が不明なものがあるが、調査区周辺で住居址の調査が行われていない状況では、当地域の古代史を考える上で貴重な資料を提供するものである。

（広濱　貴子）

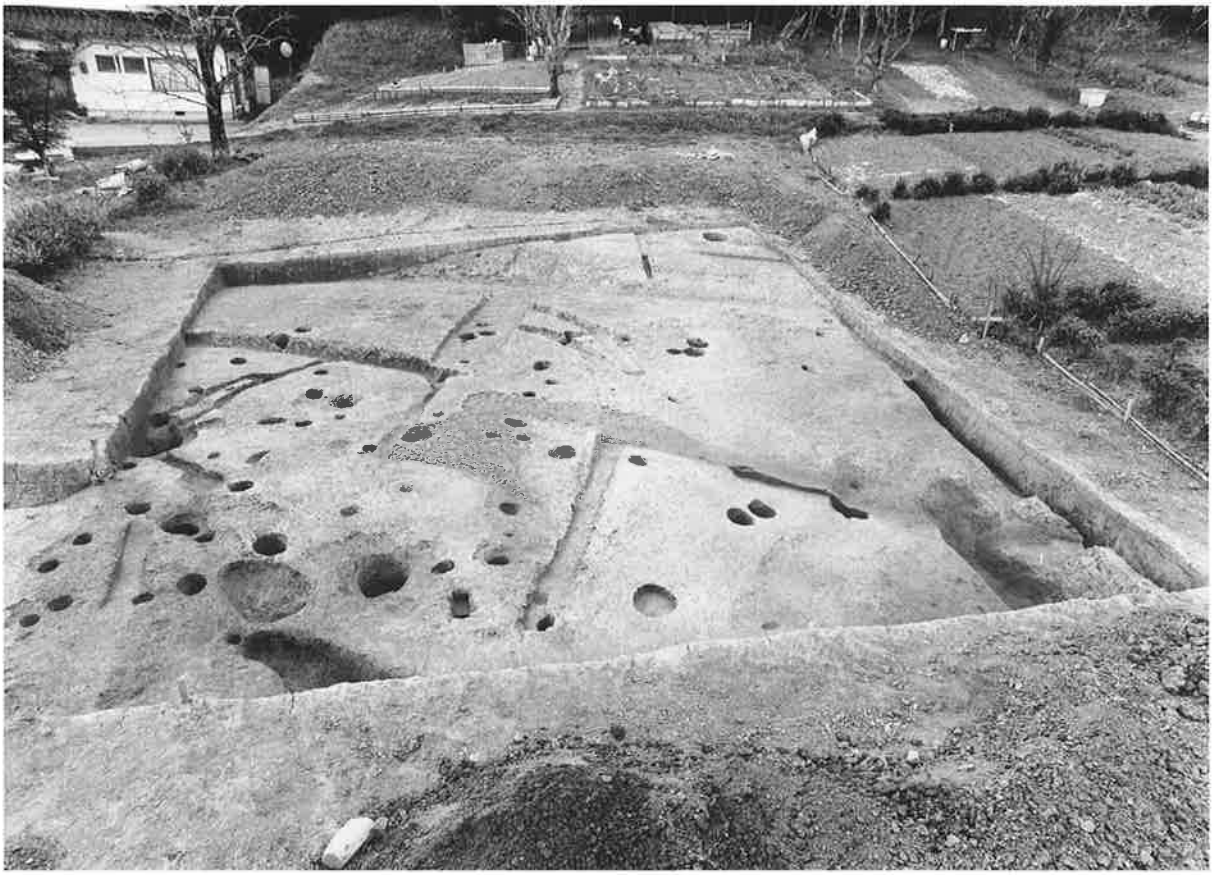
調査前全景（西から）



土器溜り遺物出土状況（東から）



ＳＸ－01遺物出土状況（東から）



完掘状況（東から）

完掘状況（北東から）